〔４番　上ケ吹豊孝　登壇〕

○４番（上ケ吹豊孝）

議長のお許しを得ましたので、一般質問をいたします。

１つ目の質問、山之村地区の観光利活用について、山之村は岐阜県東北端の標高850メートルから1,000メートルの盆地が広がる森林や山岳等の自然に恵まれた地域です。山に囲まれながらも、明るく広い平原で、開放的な景観があり、また、冬は特に雪化粧をした北アルプスの山々がとても綺麗に見えるところです。山々に囲まれた、約４キロ四方の盆地状の地形で、周辺は穏やかな自然景観、社会的景観を兼ね備えた地域であります。農業面では、夏は高冷地野菜の産地として、全国へ出荷し、冬はこの地のソウルフード寒干し大根づくりが有名で、寒干し大根といえば山之村とまで言われております。観光面では深洞湿原、天蓋山、キャンプ場、山之村牧場等たくさんあります。

しかし、神岡町時代から山之村観光開発の話が出ていましたが、なかなか軌道に乗っているとは思えません。今回、深洞湿原の散策と天蓋山登山を経験し、村の地域資源を生かすため、景観の保全を行い、景観、村づくりを進め、観光に資する事業がもっと発展できないかと思い、質問いたします。

１つ目、深洞湿原利活用について。深洞湿原は飛騨市河合町の天生湿原、宮川町の池ヶ原湿原と合わせ、三湿原として飛騨市が誇る湿原です。しかし、天生湿原や池ヶ原湿原と比べると、観光としての有効活用も景観保全もできていないのが現状です。

昨年は、天生湿原、池ヶ原湿原を視察してきました。今回、神岡に住んでいながら、踏み入れたことのない深洞湿原を山之村の知人の案内で、多くの高山植物に関して学べる視察となりました。深洞湿原へ行くには、大規模林道より約4.3キロメートルの国有林道を登らなければなりません。普段はゲートにより管理され、一般開放はされておらず、また、国有地なので許可が必要とのことです。そのため、林道から湿原遊歩道入口までは車での移動が必要です。

天生湿原や池ヶ原湿原と異なり、手つかずの自然状態を、むしろ売りにすることで、深洞湿原が山之村に客を誘引する起爆剤となり得ると思い思います。

ただし、天生湿原や池ヶ原湿原のように、無制限に入山者を受け入れるのではなく、大自然の保護に配慮し、自然に対してダメージの少ない方策を推進し、入山者のコントロール等を実施する。例えば、一日一組15人程度、三組までとか、林道はマイクロバス等で送迎する。インタープリターにより、時間をかけて、貴重な高山植物に触れながら、付加価値をつけた散策コースとし、またリピーターを増やす意味でも、新規の散策コースの開拓が必要です。その１つとして、深洞湿原より大鼠山（標高約1,500メートル）まで、現在、森林管理所の作業道があるそうです。この作業道を利用して、大鼠山遊歩道の散策コースを新設したらいかがでしょうか。

また、深洞湿原の観光を進める上で、観光のコーディネーターと自然保護の専門家と同時に進行で進めなければ、観光と自然保護の両立にはならないと思います。

２つ目、天蓋山の登山ルートの開拓。約30年前に一度、天蓋山登山をしました。当時は体力もあり、登山というよりハイキングレベルで登った記憶がありましたが、今回は途中で何度も諦めたくなるほど、大変な登山になりました。片道約3.2キロメートルです。しかし、山頂は360度のパノラマが最高で、北アルプスの数々の主峰が見渡せます。諦めずに登ってよかったと思いまし

た。

今回、登って感じたことは、登山道があまり整備されていないことで、木の根が階段状になり、下山するときに危険を感じたこと。天蓋山登山道は一本道であるため、入山者が多い日には、道幅が狭いので、すれ違いが危険だと感じたこと。そのため、約３分の２程度登った場所にある雀平からと山頂からの下山ルートを緩斜面のルート、位置的には山之村牧場へ下山するルートを新設し、安全で魅力ある下山道として開拓したらいかがでしょうか。

３つ目、冬の山之村観光事業について。冬の山之村は、一般的には豪雪地帯とのイメージがあり、観光客が訪れることはないと思いますが、山之村地区は平地が多くあり、クロスカントリースキーやスノーシューで平原や森の中を散策するのは楽しく、最適な場所ではないでしょうか。また、一部では、スノーモービルの愛好家が訪れる隠れスポットであると聞いております。

しかし、現在、山之村のアクセス道路は、大規模林道と県道484号線（通称栃洞道）を通行する２ルートですが、冬季間の大規模林道は通行止めになるので、県道484号線のみとなります。現在、ハイパーカミオカンデ工事もあり、大型ダンプの通行やカーブの多い道路で、雪道に慣れていないドライバーにとっては危険な道路です。

そこで、大規模林道を冬季間も通行できるようにするため、飛騨市、高山市と協力して、県道に昇格する取り組みはできないでしょうか。県道になれば、冬も山之村へ安全に来ていただき、冬の観光地として誘客できると思いますが、いかがでしょうか。

４つ目、山之村の新規事業について。平成20年度から始まった子ども農山漁村交流プロジェクトは、子供たちの学ぶ意欲や自立心、思いやりの心、規範意識などを育み、力強い成長をさせる教育活動として、農山漁村での長期宿泊体験活動を農林水産省、文科省、総務省、環境省、各省庁が連携して推進している事業です。

平成26年度までに、全国で162の農村漁村地域にて、受入モデル地域が整備され、累計で約17万6,000人の小学生が農山漁村での宿泊体験や、各種農業・林業体験、自然体験に参加しています。この受入事業は、教育旅行を含む農山漁村滞在型旅行にビジネスとして行っているプロジェクトなので、山之村地区でも、この事業を展開したらいかがでしょうか。

５つ目、山之村の牧場キャンプ場新設。天蓋山登山手前に従来のキャンプ場があり、コテージや炊事場、トイレが完備されていますが、設備的には老朽化も進み、若者世代には少し敬遠されそうに思います。天空の隠れ里、山之村牧場は、既存のキャンプ場とは違い、明るく、広々とした敷地と天空があります。また、牧場には多くの家畜が飼われて、動物との触れ合いもでき、家族連れにはとてもよい場所と思います。

そこで、牧場内の一区画をキャンプ場として開拓し、今ある牧場内施設の手づくり教室等を利用するなどして誘客につながると思いますが、いかがお考えでしょうか。

◎議長（澤史朗）

答弁を求めます。

〔商工観光部長　畑上あづさ　登壇〕

□商工観光部長（畑上あづさ）

それでは、１点目の深洞湿原の利活用についてお答えいたします。自然資源の保全と活用については、本年度新設されましたまちづくり観光課にて総合調整を行い、各振興事務所と連携しな

がら取り組んでおります。

山之村地区につきましては、コロナ禍で、アウトドア需要が高まる中、天蓋山、山之村キャンプ場、山之村牧場、そして深洞湿原などポテンシャルが高い地域だと考えております。

まず深洞湿原につきましては、地域の特性を生かした誇りの持てる地域資源として、平成23年10月に天生県立自然公園、池ヶ原湿原と合わせて岐阜の宝物として認定されました。平成25年からは山之村牧場を中心に、地域と連携したガイドツアーを造成し、平成26年には129名、平成27年には102名の参加がありました。ここ数年はガイドの高齢化に加え、国有林のため自由に入山できないなどの課題もあり、ガイドツアーは行われておりません。

このため、まずは資源の現状と今後の活用策を検討するため、本年７月に、山之村牧場、山之村キャンプ場、飛騨市・白川郷案内人協会と合同で現地調査を実施しました。湿原については、乾地化が進み、池ヶ原や天生のような、広々とした湿原が広がる景観はありませんが、オオシラビソ、トウヒなど、針葉樹の原生林に加えて、ブナ、ミズナラなどの広葉樹の原生林も広がっており、ほかのエリアにはない魅力が備わっていると感じております。湿原の乾地化や木道、歩道の荒廃も進んでおりますので、今年度、順次補修作業を進めているところです。また本年秋には、市民の皆様に深洞湿原の魅力を再認識いただくため、市民やガイドを対象としたモニターツアーの開催も予定しております。

今後は、乗鞍山麓、五色ヶ原の森のようにガイド同伴でしか入れない神秘の森として、期間限定で、ツアーが実施できるよう、地元関係者の皆様と連携しながら取り組んでまいります。なお、新規散策コースにつきましては、ガイドの意見やお客様ニーズを踏まえて進めてまいりたいと考えております。

次に、２点目の天蓋山登山ルート開拓についてお答えいたします。天蓋山につきましては、北アルプスが望める低山として年間約600人の登山者が訪れ、山之村キャンプ場とセットにファミリー登山が楽しめる山として親しまれております。コロナ禍におけるアウトドア需要は好調であり、全国的に日帰りで気軽に登れる低山は人気が高くなっております。天蓋山においても、本年７月末で約400人が訪れており、年間で最も登山者が多い、秋の紅葉シーズンに向け、登山道の安全確認を実施してまいります。

また、山之村牧場を登山口とした新登山道の整備につきましては、現在、登山口である山之村キャンプ場及び山之村牧場と一体的な利用促進を目的に検討を進めております。具体的な進捗につきましては、本年５月に山小屋、山岳救助隊、森林管理署等で構成される北アルプス飛騨登山道等維持連絡協議会にて、天蓋山の新たな登山道整備につきましては、北アルプスの大切な資源活用の取り組みとして、同会の協力も得て整備を進めることが了承されました。それを受け、６月には山之村地域の皆様と協議を行い、新たな登山道整備につきましては、北ノ俣登山道整備サポーターの協力を得て、現在作業を進めている状況でございます。

来月、関係機関による合同現地確認を予定しておりまして、登山道の安全性や魅力の見せ方を確認した上で、来シーズのオープンを目指し、引き続き地域の皆様と連携しながら進めてまいりたいと考えております。

続きまして、３点目の冬の山之村観光事業についてお答えいたします。山之村地区の冬の観光利用ですが、先ほど議員がおっしゃいましたとおり、冬の山之村といえば寒干し大根です。山之

村に冬が訪れ、民家の軒先に白い玉すだれのように寒干し大根が並べられる頃、多くのカメラマンが日本の現風景を求め、訪れています。

また、冬のアウトドアにつきましては、スノーシューで天蓋山周辺を楽しむお客様も増えており、冬場の需要獲得に向けては、オールシーズンの魅力と合わせて情報発信をしております。なお、山之村地区へアクセスする大規模林道につきましては、現道二車線で走行性はいいものの、冬季の通行は考慮しない前提で整備された道路であり、雪崩対策設備を有していないことから、冬季間は通行止めの措置がとられております。雪崩対策設備を全線において整備するには、多額の事業費がかかることに加え、林道基準で整備されている当該林道は、県道基準を満たしていない等の問題もあり、大規模林道を県道昇格させることは困難であると考えております。

また、仮に県道昇格となったとしましても、現在の県道は市道に移管され、移管後の約23キロメートルの道路を市が管理することとなり、冬期の除雪など、維持管理面における市の負担を考慮した場合、同様の結論となりますので、ご理解をお願いいたします。

次に、４点目の山之村の新規事業についてお答えいたします。子供たちが農山漁村地域での体験を踏まえ、自ら成長していく子ども農山村漁村交流プロジェクトの活用につきましては、最終的に地域のビジネスとして定着することが重要だと考えております。

そのためには、現在、山之村牧場で実施している様々な体験に加え、ヒダスケ！による地域貢献プログラム、さらに今後は自然資源を活用したネイチャーツアーの計画を進めつつ、まずは地域として持続可能なプログラムを磨き、集客につなげていくことが必要です。少子高齢化が進む中、様々な体験や交流を通じた関係人口の拡大は重要であることから、引き続き地域の皆様と連携しながら取り組んでまいります。

最後に５点目の山之村牧場キャンプ場新設についてお答えいたします。山之村キャンプ場の利用者につきましては、コロナ前の平成31年で年間1,200人、コロナ禍の令和３年では700人と、減少傾向にあります。施設の老朽化が進む中、順次、修繕工事を行い、環境改善に努めておりますが、コロナ禍におけるアウトドア需要を十分に獲得できていない状況にあります。

このため、来年度からは山之村キャンプ場をはじめ、山之村牧場、天蓋山、深洞湿原、さらに北ノ俣も含め山之村全体を天空のアウトドアフィールドとして山岳メディア等と連携したプロモーションを進めるとともに、ヒダスケ！等を利用した自然環境保全ボランティアの拡大にも取り組んでまいりたいと考えております。

なお、山之村牧場内でのキャンプ場新設については、牧場経営者や利用者のニーズを踏まえて検討してまいります。

〔商工観光部長　畑上あづさ　着席〕

○４番（上ケ吹豊孝）

ありがとうございます。まず１点目の深洞湿原のことなんですが、平成25年からツアーガイドを利用して入山をされているということなんですが、私もうたっているようにあれだけまだ開発していないところに、無造作に入山するとやっぱりどうしても外来種とかそういったことで、自然が荒らされるということで、ガイドツアーを導入してやることは大事なんですが、今、結局、ミズバショウがあったのが乾地化するということもありました。

それで確かに木道が壊れているところもあったんですが、例えば、自然に乾地化されたところ

を整備するのか、それともそのまま自然として残っていくと思うのですが、今、深洞湿原を観光化するとした場合、どういったイメージがあるのか。新しくして入山者に見てもらえるようにするのか、それとも自然に乾地化したところもそのまま残して観光として進めるのか、その辺をちょっとお考えをお聞かせください。

◎議長（澤史朗）

答弁を求めます。

□商工観光部長（畑上あづさ）

乾地化している部分につきましては、今回、立ち入り調査をした時点で、今そういった状況を把握した段階にありますので、今後、深洞湿原のことをよくご存知のガイドさん方のお話であるとか地元の方のお話も聞きながら、そこに対してどういう対処をしていくかということは、これから十分検討していきたいと思います。

○４番（上ケ吹豊孝）

私が思うのは、やっぱり観光と自然保護というふうに言わせてもらったんですが、やはりそれを同時に進めないと、後手になってから外来種が入ったりとかあるので、その検討されるときに、十分自然保護と観光両面で進めていただくようにお願いしたいと思います。

あと２点目の天蓋山なんですが、昨年は600人の入山者というふうに確か言われたと思うんですが、安全確認というふうに言われたんですが、部長はその天蓋山に登ったかどうか私は分からないんですが、恐らく安全確認したということであれば、私はかなり危険なところがあったと思います。

ここにも書いていますけど、木の根っこが階段になって、登るのにちょっと歩幅が大きいとか、下るときに根っこがむき出しになって、つまずくとかそういったことがあるので、やはり登りも大変ですが下山が特に滑るような気がしたものですから、ロープも確かに設置してありますけど、やはり、下山ルートを検討されているというふうに伺ったんですが、早急に下山ルートを検討していただいて、アルプスを見ながら下山するというのも、今のルートですと、かなり急で足元しか見られませんけど、緩斜面の下山ルートを新設すれば観光として非常に魅力があると思います。

今、検討されているということなので、早急に新ルートをやっていただきたいと思うんですが、今、検討されている段階なんですが、例えば下山ルートを新設されるとした場合、何かスケジュール的なところがあればお聞かせください。

◎議長（澤史朗）

答弁を求めます。

□商工観光部長（畑上あづさ）

新ルートの確保につきましては、先ほど申し上げたように、今年度いろいろ作業を進めていただいておりまして、来シーズンにオープンできることを目指しております。

それから、私、現地には登っておりませんので、自分の目では確かめておりませんけれども、既存のルートの危険なところとか、草が伸びているところ、それから倒木があるようなところについては、今、整備を行われて、ちょうど昨日完了したところだということで報告を受けておりますので、申し添えさせいただきます。

○４番（上ケ吹豊孝）

部長ぜひ、一度登っていただいて、やはり部下に指示するときは、目で見たほうが的確な指示が送れると思いますのでよろしくお願いします。

それと、登山道は最近やられたということで、私が登る後にやられたということで、これから紅葉シーズンですので安全に登って、お客さんが来ていただけると思います。

それと地元の方に聞いたのは、県外の方の入山者が多いということで特に富山県の方が非常に多いということで、そういった県外の方もいらっしゃるので、ぜひもう少しＰＲして入山していただく。飛騨市の事業は結構無償なんですが、やはり整備するのにも税金を投入するので、何とか入山料を取ってでも、魅力ある天蓋山、深洞湿原にして欲しいというふうに思っております。

あと、冬の山之村、県道に昇格する件なんですが、県道に昇格しても市で管理しなければならないということだというふうに聞いたのですが、県道に昇格が万が一できたら、県の補助金で除雪するということにはならないのでしょうか。

◎議長（澤史朗）

答弁を求めます。

□基盤整備部長（森英樹）

大規模林道を仮に県道に昇格したとすると、今ある栃洞道など、そちらのほうは市道として管理するという、県の管理が山之村へ行く道二本を管理するというわけにはいかないので、その場合にはそういったことになりますというお話は伺っておりまして、そうなると、今のその栃洞道のほうを市が管理できるかという問題もございまして、なかなか難しいのではないかということでございます。

○４番（上ケ吹豊孝）

林道で整備したので、雪崩防止対策とかをしていないので、なかなか困難というふうに言われたんですけど、やはり先ほどフルシーズンで観光を目指すのであれば、やはり栃洞道は大変危険な道路なので、何とか困難ということはできなくはないというふうに理解していますので、ぜひ前向きに検討していただくようにお願いしたいと思います。

あと、キャンプ場の件なんですけど、今、既存のキャンプ場、天蓋山に登るときに途中にあり、たまたま休日に行ったものですから、家族連れとかいらっしゃったんですけども、やはり私も若い頃にキャンプ場に行ったそのままで、確かにコテージができたりトイレやシャワールームができているんですけど、やはり設備的に都会の方が来るイメージと少し違うかなと思います。

私が推すのは牧場のほうの一角、あそこは広々して、芝生も生えています。あまり手を加えなくても、トイレもあります、飲食の設備もあります。

最近、都会の方のキャンプというのは手ぶらで来て全て現地で調達するということを聞いております。地元の方に聞いたら電話で電子レンジはありますか、テレビはありますか、そんなことを聞かれるらしいので、やはりニーズに合ったキャンプ場を作るとすれば、今の牧場のほうに作られたらいいのではないかというふうに思っております。

それと、あとこれは市長に１つ伺ってよろしいですか。天生湿原、池ヶ原湿原は市としてもかなり事業を進められているんですが、どうしてもイメージ的に山之村となると少し遅れを取っているのかなというイメージがあります。そこで市長として、今後、描いている山之村の、特に私

は観光というふうに思ったのですが、観光事業、描かれているもの、ビジョンがあればお聞かせいただきたいと思います。

◎議長（澤史朗）

答弁を求めます。

△市長（都竹淳也）

確かに三湿原の中では、これはもう３つとも北飛騨の森、岐阜の宝物になっている三湿原なんですが、遅れをとっていると言いますか、なかなか開発が行き届いていない、活用が行き届いていないのは事実だと思います。

一番の問題は先ほどもありましたけども、やっぱり国有林の中にあって、非常にアクセスが良くないというところが一番大きくて、なおかつ、どうしても逆に木道はすごく飛騨市の早い時期にとても立派なものが整備されているのでもったいないんですけれども、離れていて、しかもなかなかアクセスができない、しかも駐車場がなかなか取れないということで、ガイドをつけて入るということがどうしても必要になる。それで、ガイドが山之村でなかなか確保できないということで、何とかできないものかと言いつつここまできているというのが実情です。

そうなると、ビジョンというお話なんですが、先ほど部長からも答弁ありましたけれども、やはりフルに、例えば池ヶ原湿原のように交通アクセスが良くて、簡単に行けるというところと同じ扱いはできないので、フルに年間活用するというよりは、年間何日しか開かないというそういう神秘の森的な扱いにするという希少価値を出すというやり方が、一番適当ではないかというふうに思っていまして、実際にそうした希少価値を出すことによって、逆に価値が高まるということです。

例としてはみやがわ考古民俗館が年間フルオープンが無理な代わりに、年間30日とかにしたことで逆に話題が出て、注目されているという例もありますので、やはりそうした希少価値を出しながら、神秘の森的にしていく。

それで、その代わりしっかりガイドをつけて細かいところまでご案内ができるようにしていくというのが、やっぱり道かなと思いますので、そういう関係の中で、三湿原は大事な一角ですので、もう少ししっかり力を入れて、手入れができて、皆さんに来てもらえるようにしたいというのが私の考えでもあるということでございます。

○４番（上ケ吹豊孝）

私も今の市長の答弁がなかったら言おうと思ったことなんですが、やはり無作為に入山するのではなくて、今、言われたように付加価値をつけて、深洞湿原へ行くには予約も大変、ガイドも立派、そういったところでなかなか普段では入れないというのをつけて、入山料もかなり高く取って、なかなか入れないぐらいのＰＲをして、もう競争になるぐらいのそういったことをすれば、やはり湿原以外の天蓋山も行かないと駄目だとか、そういったことをすれば、何とか山之村の魅力も発信できると思いますので、ぜひ自然保護を守りながら、何とか進めていただきたいと思います。

最後と言ったので、この質問はこれで終わって、次の質問に移ります。２つ目、学校教員の勤務状態と課題。新聞報道によると、公立小中学校教員の勤務状況が過酷になっている。少子化が進んでいるにもかかわらず、デジタル対応が拡大、教員の半数は勤務時間中の休憩時間がゼロと

ある。精神疾患による休職者は約5,000人の高止まりが続いていると報じられています。

文部科学省の調査によれば、小中学校の教員一人当たり児童数を算出すると、2010年、15.7人から2020年には14.2人と、約１割減ったが、負担は逆に増えている。原因として考えられているのが、情報通信技術ＩＣＴの教育活用が重荷になっていると言われ、デジタル化による新期事業が背景にあるようです。

また、岐阜教員組合の教員対象に実施したアンケート結果が公表されていますが、その中には、小学校、中学校、高校の時間外の勤務時間は１日２時間を超え、休憩時間は小学校で１日平均４分程度、中学校で６分程度にとどまっているとなっている。時間外労働１か月では、小学校、高校で63時間、中学校で78時間だった。過労死ラインとされる月80時間に迫っているとあります。こうしたことから、飛騨市の小中学校の教員の勤務状況について伺います。

１つ目、ＩＣＴ導入により、教員の負担状況は。市は、今年度、ＩＣＴ支援員を１名増員し、全ての小中学校において、週一回の訪問を可能にすることで、業務内容の改善を図り、児童生徒の課題解決能力や、情報活用能力を育むとありますが、教員は授業前準備や生徒の端末不具合対応など、多くの負担があるのではないかと推測します。飛騨市のＩＣＴ事業の課題と教員の負担状況を伺います。また、ＩＣＴに不慣れな教員もいると思われますが、どのように対応されているかも伺います。

２つ目、市内教員の時間外労働は。前段に記したとおり、ＩＣＴ導入で教員の重荷になっていると述べましたが、飛騨市において、教職員の時間外労働や休憩時間はどのように把握されていますか。また、どのような改善策をとられているか伺います。

３つ目、部活の地域移行について。飛騨市も、教職員の時間外労働の改善と少子化で学校部活ができないことから、地域スポーツクラブとして活動する方向性だと思いますが、現在飛騨市では、試験的に行っていると伺いましたが、どのような状況ですか。また、教員の負担軽減につながっているのか伺います。

◎議長（澤史朗）

答弁を求めます。

〔教育長　沖畑康子　登壇〕

□教育長（沖畑康子）

では、私から学校教員の勤務状態と課題について、３点お答えをいたします。

まず１点目のＩＣＴ事業による教員の負担状況についてでございます。機器の使用につきましては、ＩＣＴに不慣れな教員は少なからずおります。そこで、令和２年度より教職員のＩＣＴ活用研修を定期的に行い、スキルアップに努めてまいりました。今年度はＩＣＴ支援員を２名増員し、３名体制で各学校を訪問し、授業に入りながら、事業者や児童生徒の操作をサポートしたり、ＩＣＴの活用の幅を広げるための支援を行ったりしております。

また、飛騨市教育研究所主催で、県のＩＣＴ活用アドバイザーを招いて、ＩＣＴ活用研修を各校で年２回実施しております。さらに、各校のＩＣＴ活用推進を担当する教員を対象としたＩＣＴ活用研修も年２回実施しております。ほかにも、ＩＣＴ活用に不安のある教職員を対象として、夏季休業中に夏季講座は２回開催しまして、タブレット端末の具体的な活用方法について学んでおります。

ＩＣＴの導入当初は、全教職員にまず機器を使ってみることを進めてきましたが、現在では、より有効に活用できないかを考えながら使用することで、ＩＣＴ活用のよさを実感する場面が増えてきております。教員からは、ロイロノートを使うことで、子供たち一人一人の考えがすぐに把握できるので、「個別の指導がしやすくなった。」「子供たちは自分の考えを簡単に修正できることで整理しやすく、考えを深めることにつながっている。」などの声が寄せられております。

何事も初めての操作を覚えるのには負担になりますが、子供たち一人一人の個別最適な学びに生かすことができ、子供たち自身が主体的、対話的に学習に取り組み、力を伸ばしているのを実感しますと、負担を感じる以上に喜びのほうが大きいと考えております。

２つ目の市内教職員の時間外労働についてでございます。教職員の時間外勤務時間については、毎月各校から教職員一人一人の状況が報告され、45時間を超える教職員は日頃から管理職が声をかけ、時間外業務の内容を確認しています。そして、特に時間が多い教職員については、業務改善に向けて関係職員との連携を図りながら具体的な目標を立て、翌月の勤務に生かすようにしております。

また、早く帰る日や退校目標時刻を設定したり、行事を見直し、練習や準備にかける負担を減らす等の取り組みを各校で行っているところでございます。今年４月における45時間を超える教職員は76名でしたが、５月は72名、７月は25名と徐々に減ってきており、教職員一人一人が自身の働き方を考え、業務改善に努めてきた成果が見られています。

また、休憩時間については、学校は登校から下校まで児童生徒が常に何らかの活動を行っているため、決められた時間に全教職員が一斉に休憩時間を取ることはできません。そこで、小学校においては、担任が一日中教室にいることがないように、教頭や教務主任、加配教員等が、一部の授業を受け持つことで授業をしなくてもいい時間を作っています。

中学校においては教科担任制で、それぞれに授業が入っていない時間があります。こうした時間を使って、職員室で休憩をとることができるようにしているところでございます。

３点目の部活動の地域移行についてですが、まず、部活動地域移行の最も重要な目的は、少子化の中でも、将来にわたり子供たちがスポーツや芸術文化に継続して親しむことができる機会を確保することにあります。その上で、現在、令和８年度を目途として、学校部活動から平日も含めた地域活動への完全移行を目指して取り組みを進めているところです。

今年度、古川中学校と神岡中学校では、サッカー競技とソフトボール競技において、単独チームでの編成ができないため、合同チームで活動しています。市では、５月から８月まで、毎週金曜日と土曜日、合同チームで一緒に練習ができるよう、神岡中学校と古川中学校間を移動手段としてジャンボタクシーを一往復させました。

また、神岡中学校陸上部の土曜日練習に山之村中学校の生徒が参加し、部活動指導員の下で、合同練習を行っています。

今後、他の種目でも、こうした合同練習を実施しながら、体制づくりや課題解決を図りながら、地域でのスポーツ活動へと移行させていく予定でございます。

現在は、まだ学校部活動であり、教職員が顧問を務めていますので、制度的に大きな負担軽減はありません。平日の放課後や土曜日、日曜日、祝日といった勤務時間外で部活動指導に当たっています。

しかし、ガイドラインに沿った活動時間を守ることや、学校の日課を見直し、終了時間を早めたことで、改善もされてきているところです。今後、地域活動への移行が進めば、これまでの部活動指導の時間を授業準備や自身の指導力向上のための研修等に使うことができるようになり、負担感のあった教職員にとっては大きく軽減されることが考えられます。

また、部活指導にやりがいを感じている教職員は、地域指導者となることで、学校が変わっても部活動に携わることができ、充実感を得ることができると考えております。

〔教育長　沖畑康子　着席〕

○４番（上ケ吹豊孝）

ありがとうございます。１つ目のＩＣＴ支援員が３名ということで、ＧＩＧＡスクール構想がコロナ禍で早くなったということで、先生方も大変だったと思うのですが、これも慣れということで、当初から比べたら、１年以上経過して、多分、当初よりは先生の負担も少なくなったのかなと思うんですが、教育長の感覚で、あと何年ぐらいしたら今いらっしゃる先生は支援員がいなくても、十分授業の対応ができるというイメージだけでもお聞かせいただければと思います。

◎議長（澤史朗）

答弁を求めます。

□教育長（沖畑康子）

必要なくなるということはないのではないかと思っています。と、申しますのは、ご存知のように、どんどん、どんどんＩＣＴも進化しています。そうすると、いろいろなことが変わってきて新しいものが次々と出てくる中で、本当にどちらかというと、もっとスピードが上がってくるとするならば、まだまだ必要なところはあるのではないかというふうに思っております。

○４番（上ケ吹豊孝）

私、支援員の方の職業内容は把握していないんですけども、単純に操作の仕方とか、そういったことのフォローかなと思ったんですが、今、聞くと当然、いろいろなソフトが入ってきて、それの支援だというふうに思っていますが、そうすると、やはり週一回ぐらいのフォローだというふうに何かで調べたんですが、もっと支援員は増やさなければならないということなのか、それとも今の３名体制でしばらくやっていくということなんでしょうか。

◎議長（澤史朗）

答弁を求めます。

□教育長（沖畑康子）

おっしゃいますように、今の機器の使い方であるとかにつきましては、定着をしてきております。ですから、できていることもある中で、今後新しいことが入ってきたことを次々とそこに加えていくということでございますので、そんなに増やしていくということ必要はないかなと思います。

○４番（上ケ吹豊孝）

ここに書いてあるように、先生の負担はそのＩＣＴを導入したことで作業量が増えたということなんですが、先ほどの教育長の答弁では、それよりも子供さん生徒さんが理解するのが喜びだということで、精神的なダメージはないかなというふうに理解しました。

あと、時間外労働なんですが、調査によりますと、結局、先生は時間外労働が増えると、管理

職から指導されるということでアンケートでは、家の持ち込み作業ですか、それが３割ほどいるという結果らしいんです。

それで、やはり今、時間外労働が厳しい中で、そういったことで、家へ持ち帰っているということは、飛騨市はあるのかどうか。なかなか報告されないと思うんですが、その辺の管理、調査はどのようになっていますか。

◎議長（澤史朗）

答弁を求めます。

□教育長（沖畑康子）

家へ持ち帰っている部分も少しあるかと思います。ただ、今、学校では個人情報でありますとか、そういったものに関しては持ち帰らないという方針で行っておりますので、ほぼ学校で済ませて帰られるようなのではないかというふうに思っております。

ただ、教材研究というのは、どこまでやっても尽きないものです。深く勉強すればするほど本当に疑問も増えてまいりますので、そういった勉強においては、家でもやっていったりと、どんどん時間をかけているのではないかと思いますけれども、そこにつきましてはそれを勤務とするのか、自己研修とするのかという考え方の問題でありまして、明日の授業をするまでにおいて、今、最低限必要なことではないかというふうに思います。

○４番（上ケ吹豊孝）

あまり負担にならないような家庭持ち込みが重要だと思います。それと、先ほど教育長の答弁で、やっぱり一般企業も学校の先生も能力差というのは当然あるんですよね。そうするとやっぱり時間外が増える先生もいらっしゃると思います。それで、管理職の方のフォローでそういった時間外勤務をなくすということを言われたので、ぜひそれは今後も継続していただければ、先生の負担が減ってくるのではないかというふうに思っております。

あと、部活の地域移行なんですが、今はまだ学校の先生がクラブ活動を見るということだったんですが、確か予算特別委員会では、いずれは地域のそういった、例えば野球であれば野球の経験者、サッカーならサッカーの経験者の方に面倒を見ていただいて、先生のクラブ活動の負担をなくすというような話が頭の片隅にあるのですが、その辺の移行というのは考えていらっしゃるんでしょうか。

◎議長（澤史朗）

答弁を求めます。

□教育長（沖畑康子）

地域部活動になれば、もう学校とは切り離されますので、地域の方にやっていただくということになりますので、現段階におきましては、学校教職員とともに、部活動指導員でありましたり、それから練習を支援していただく地域の方々にもかなりお願いをして入っていただき、わずかでございますが報酬をお支払いします。

○４番（上ケ吹豊孝）

先生の負担をなくすためにそういったこと、それと文系、スポーツ系問わず、やはりスキルを上げるには専門家に指導していただいたほうがいいと思うんですが、ここで１つ問題になっているのは、学校での生徒の生活が指導者に伝わらないので、そこがちょっと問題がある。

やっぱり学校で、例えば親に叱られて学校に来た、学校の先生に注意されてしょげているお子さんが、今度、クラブ活動で少し元気がないときに指導者からその理由がわからずに、そういった注意を受けるということで、その辺の課題があるというふうに伺ったんですが、まだ今、飛騨市はそこまで行ってないということなので、そういったことも含めて、単純に技術が上がるから移行するというのではなくて、そういった子供のメンタルの部分も配慮して、移行していただければというふうに思います。

それと、最後なんですが、先生がそういった仕事の負担で休職されるということは、当然先生も守らないといけないのですが、やはり最終的には生徒を守るということなので、十分、先生の労働時間の把握をしていただいて、休職のないようにお願いして質問を終わりたいと思います。ありがとうございました。

〔４番　上ケ吹豊孝　着席〕